
人形姫の終わりになき歯車

月影 舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形姫の終わりになき歯車

【Nコード】

N1309G

【作者名】

月影 舞

【あらすじ】

魔族を倒すために作られた機関に入団した七人の少年少女。彼らの出会いによって、魔王は再び動きだし、神のひとつの賭けが始まる。辛い記憶を背負う彼らは、何を思い、傷つき、生きていくのか。今、ここに記される・・・

ブログ（前書き）

約半年も更新をしないで、楽しみにしていたださった方がいらっやったら、申し訳ありませんでした。とりあえずは、ブログをどうぞ。

プロローグ

なんでもない日常が続くはずだった
あの日

いつもの朝、いつもの笑顔があつた
最高の一日になるはずだった

けれど

何の前触れもなく

すべてもろく砕け散った

いや

まだ知らなかった

ずっと先に待ちうけていた仲間との冒険も、恋も

何もかも・・・

アイツさえこなければ

あるとき

すべてが憎かった

みんな、私のように壊れてしまえばいい

そう思っていた

今、毎日が幸せだ

あの頃と変わらない幸せが、ここにある

今ある仲間との冒険も

楽しいものとなると思っていた

そう、

自分の運命が、

なにもかも砕け散っていたことを忘れて・・・

1度碎け散つても

全ての欠片を集めれば

元に戻る

作り直せる

しかし

誰よりも無邪気で残酷な神は

そんな運命を

あっさりと握りつぶす

そんな私を

あざ笑うようなように・・・

プロローグ（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。これからなるべく更新できるよう、頑張りたいです。内容は変わりませんが、所々表現を変えていたりします。どうぞ、読んでみてください。

次章から、後書きは登場人物との対談にしたいと思います。しかし、最初のほうは全然出てこないの、特別ゲストとして、「神様」にお相手してもらいます。どうぞよろしくおねがいします。

第一部 一章 祝福されし樂園

この世、魔族が世界を恐怖のどん底におとしいていた。昔、スカイリハジャー——魔王を倒すために神によって選ばれた者たち——の手によって封印されていた魔王が、永きときを経て復活したからだ。魔王はまた、自分を封印する可能性のある者を殺しまわっていった。

ある小さな村が魔王に襲われた。そして、ひとりの少女が生き残った……。

*

ある小さな個室。部屋の中に明かりはなく、ただ闇がその部屋を支配している。音などない。

ひとりの16歳位の少女が壁にもたれかかっている。瞳はどこを見るわけでもなく、見ないわけでもなく。身動き1つしない。闇は、少女自身のものであった。

カチャツというかすかな音とともに、扉が開いた。そこから眩しいほどの光があふれてくる。フードをかぶった男が前に出て言った。「そろそろ時間です」

それだけ言うと、少女の返事も聞かず男は逃げるようにさっさと出て行ってしまった。後に残されたのは、少女と闇。少女は音もなく外に出た。光の侵入は許されない。闇は、変わらず支配を続ける……。

*

雲ひとつない晴天。南からは春を感じさせる風が吹きぬけ、大地

をなでていき、鳥達を乗せていく。その眼下に広がるは色鮮やかな建物の波。

ここはフィドリユーレ王都。人族最大の都市だ。

ここではるか昔——といっても100年前のことだが——1人の魔道士がふらりと現れ、それまで誰も成し遂げられなかった、魔族だけを通さない結界を国全体にかけていった。そのおかげで魔族の襲撃がこないため、人々は笑顔を浮かべ安心して暮らしている。もちろん結界を一步でも出れば安全だとはいえないが、だからこそ、フィドリユーレ王都は世界で唯一安全な都市——別名『祝福されし楽園』——とも言われている。

王都には50余りの倉庫がある。

その中の1つ、『F-15』。いつもは静かな倉庫だが、今日はたくさんの人々にぎわっている。

今日は『王都使節団』の合格発表日。そのため、受験者が押し寄せているのだ。『王都使節団』とは、フィドリユーレ王都が魔族を討伐するために結成させた、民間人による機関の事だ。

この時代、魔族が暴れまわり、人族は多大な犠牲を払わされていた。その魔族を滅ぼし、世界を救おうと立ち上がった王都の王——パリデイル王自らが考えたものだ。

『王都使節団』は、世界の人々の憧れである。入るには心意気だけでなく、確かな強さを持つていないといけない。もちろん下級の魔族を倒せることは必須の項目のひとつ。そのため、入団できたのであればたちまち尊敬の目で見られた。

第一部 一章 祝福されし樂園（後書き）

作「こんにちは、作者です。前章通り、今章から後書きで対談をさせてもらいます。では、ゲストの『神様』です」

神「どうも。神です」

作「ようこそ神様。・・・」

神「・・・」

作「・・・」

神「何を言つかぐらい考えときなよ、作者」

作「そう言われても、話も全然進んでないのにどうやって話を進めると？」

神「仕方ないなあ。僕が話をふったげるよ」

作「さすが神様。で、何？」

神「執筆状況どうなの？」

作「（何か微妙な質問）前回更新が終わったところから一章分は見直しも終わっていつでもだせます」

神「一気に投稿しないの？」

作「そんなことしたら自分を追い詰めちゃうので、小出しします」

神「自分の為かよ」

作「仕方ないよ。また更新が遅れるよりはまし。さて、長くなったので今章はここまで。神様、ありがとねえ」

神「いいよ。どうせ次も僕でしょ？」

作「当たり前。次の質問も考えといてね」

神「はいはい。皆みてね」

作「さようなら」

第一部 二章 二人の合格者

受験者は毎回1000人を軽く超え、受かるのは20人余りだ。倉庫の前では悲嘆にくれている人が多い。

その中、面倒くさそうな顔が2つ。

1人は少し癖のある黒髪にまだ少し幼い顔をしていて、もう1人はストレートの少し長いうすい緑色の髪に大人びた顔立ち。2人も15、6位だ。

「あゝあ。バツカみてえに集まってやがる。ぜってえ受かってるって奴だけ集まれば良いに」

黒髪の少年が口を開く。

目の前に群がる人々を見ながらどうでもよさそうに。彼の横にいるもう1人の少年も同意する。

「自分の力に酔ってるんじゃないの。自意識過剰だね」

こちらもどうでもよさそうに、落ちた人が聞いたら怒り出すであろう言葉をさらっと言う。実際、聞きとがめた周りの男の目は少し険悪である。

どうして彼らはここまで落ち着いているのか？ 理由は簡単。彼らは自分の力に絶対の自信を持っている。

彼らは強く、魔族も倒した事がある。下級とはいえ圧勝したのだ。もちろん、テストは合格。そんな2人にとって、凡人達のことなど興味がない。

その後も2人は受験者に興味なし。流れる人ごみを何ともなしに眺めている。

おもむろに、黒髪の少年が言った。

「ラウ、見ろよ。あそこ。あの姉ちゃん結構いけてねえ？」

ラウと呼ばれた少年——ラウサは彼が指差す方向を面倒くさそうに見る。彼はしばらく目をきよるきよるさせた。

不意に言う。

「どいつのことを言っているんだ？ デイル。特に目立つような奴は居ないぞ」

心底わからないという感じた。デイルと呼ばれている少年——デイルスはあきれたような顔をした。それにはどこか諦めの気持ちが隠れている。

「ラウ、俺にはお前の美人の基準がわからねえ。この前だって村一番の美人、マリーサに告白されといて『うざったい、近づくなブス』とか言っただけだったか？」

そう、この少年美的感覚——というか女性に対しての認識がずれている。読者の方々が知る アイドルや美人が、彼にとってはそこらへんにいる女となんら変わりがないのだ。

（仕方ねえよな。ラウの家族って美男美女ばかりだからなあ。こいつにとっては当たり前なんだろうなあ。しかも妹はそんな中でもひとときわキレイだからなあ。見たことねえもん。あんなの）

さっきマリーサは村一番といっていなかったか？ まあ、この事は置いて、小さい頃からの友をこのように評価する。

「ラウ、俺にはお前の将来が心配だ」

デイルスは心底心配した。

「何の事だ？」

ラウサは不思議そうに眉をひそめる。

（いや、こいつも恋を知れば変わる。うん、大丈夫だ！ でもこいつが恋をするほどの女性って・・・）

納得したような顔をしたかと思うとまた曇らせる。そんなデイルスを不思議そうに見、またか、という感じであきれ人ごみに目を戻す。いつもいつもこの調子だ。人に問い掛けておきながら勝手に自己解決する。周りを大いに混乱させるのだ。ラウサは長年の経験から無視する事に決めている。

ピン ポーン パーン ポーン

お決まりの音が流れ、アナウンスの声が流れる。

『お待たせいたしました。合格者の方は倉庫左側の扉より中に入り、受付に行き説明を受けてください。繰り返しです。合・・・』

放送が流れると、何人かが倉庫の左へ行こうとしている。どう考えても合格者数より多い。まだ未練たらしくほんの少しにかけているのだろうか。

「ラウ、行こうぜ」

ディラスはそれだけ言うと、返事も待たずに人々の間を縫うようにして進む。ラウサは黙ってそれについていった。

第一部 二章 二人の合格者（後書き）

作「さあ、やってまいりました。作者と神様の対談コーナー！」

神「どうも！ 皆の憧れ、神様だよ」

作「ノリいいね、神様」

神「神だからね。それで今回はどうするの？」

作「前回言ったとおり、神様に質問してもらいましょう」

神「めんどくさいな。考えてないよ」

作「そこは神の力でどうにかしようよ」

神「あのね、神様だからって話題を考えるのが得意って訳じゃないんだよ。神様って何でも出来るって思ってる人が居るけどそうじゃないんだYO！」

作「何、最後の『YO！』って。きも！」

神「ひどい。せつかく対談に適した明るい性格でしてあげてるのに」

作「うーん。そこには感謝するけど、そんなことより質問または話題を考えろ」

神「最後は結局命令かよ・・・うーん、じゃあ上の二人、誰？」

作「知ってるくせに何言ってるの？」

神「僕は知ってるけど読者の皆様は知らないでしょ？ このバカ作者」

作「バカとは失礼だな。このチキンが」

神「カツチン・・・。本気で怒るよ？ 作者」

作「残念だけど、君は僕には逆らえないね。今ここで君の設定、滅茶苦茶にしてあげてもいいんだよ？」

神「職権乱用」

作「何とでも言え。じゃ、こんなゴミムシは放って置いて、今日の登場人物について話そうか」

神「つかもうそろそろ今章はやめたほうが良いんじゃない？ 結

構長くなってるよ」

作「このミジンコ以下の存在（神）が邪魔するからだよ。仕方ない。次章で話そうか」

神「誰がミジンコ以下の存在だ」

作「それでは皆様、今章はこのあたりで」

神「無視すんなよ」

作「では、次回予告。『倉庫へと向かった二人。そこで受付の女性はデイラスに対し・・・』です。お楽しみに！」

神「結局最後まで無視された・・・ま、いいけど。どうせこうやって会話は残るから読者には通じるし。では、皆さん、次のゲストはラウサが来ると思います。いや、ちょっと忙しくてね。ごめんね？

すぐまた登場できるよう、作者を脅・・・コホン、頼んでみるから。じゃ、ばいばい」

作「くす。神ごときが私を脅せるわけないでしょう？ 愚かな奴・・・

・だからナターシャも君を拒絶したんだよ。君があまりにも可哀想
だったから・・・ねえ？ 神様・・・」

第一部 三章 受付嬢の仕事

倉庫の中は意外と明るく、冷房設備もしつかりとしていてちょうど良い。しかし、普段は余り使われないせいか置いてある荷物は少なく、隅の方にはうつすらとだが埃が溜まっている。倉庫の少し奥の方にはテーブルが並べられ、何人かの女性が脇に分厚い資料の束を置き、椅子に座っている。すでに来て資料を受け取った人々があちらこちらで読んでいる。ディラス達も列——といっても1、2人前にいるだけのものに並ぶ。

受付の女性——サリアは、はつきり言って退屈していた。『王都使節団』の合格者受付という仕事は、普通ならば喜ぶ役職のはずなのだが、受かるのは半分が女で、男はごついのはっきりと彼女の好みではないのだ。彼女の好みは、少し若めのスラリとした美形で、何よりもクールなのが絶対条件。使節団に受かる人の中にはなにかいないのだ。もともとそれ目当てでやっているサリアにとってつまらない事この上ない。

（あゝあ、今回も駄目かな。残りは40代のおっさんと15歳の子供——サリアは21歳——だし。そろそろ潮時かな）

などと完璧に仕事以外のことを考えている。

（あつ、でも子供でも大人になれば美味しそうになる奴いるかも）
勝手にやる気を出し始め、ヒタと目の前にいた人物に目をやる。
そこにいたのはディラスだった。彼女はすぐさま値踏みする。

（美形、ともいえないことはないけど・・・顔——普通、背——普通、体型——中の上・・・。まーまーね。これ位ならどこにでもいるわ。そこら辺の子供つと）

なんだか勝手に『そこら辺の子供』に分類されたディラスは、サリアの視線に少したじろく。

「あなたの番号と名前を言って」

面倒くさそうに、命令口調で言う。もう興味はない。

「827番、ディラス・ライシールド」

サリアの命令口調と態度にむかつきながら、最低限の語句でぶつきらばうに答える。

ディラスの態度を気にもせず、手元の名簿に丸をし、残りわずかな資料の束から一部取り、無造作にテーブルの上に置く。今流行の、自分の爪に宝石やガラスなどをつけたり、特殊な液で艶を出したりするおしゃれ、マニキュアを見ながら言う。

「それに同意するなら3日後、書類にサインをして本部に持っていく。あゝもう面倒臭いから後はその人に聞いて」

随分とはしよってそれだけ言い終えると、もうどっか行けという感じの視線をディラスに向ける。が、直ぐにまたマニキュアに戻す。ディラスはここまで露骨な反応をとられ、はいそーですかと引き下がるほど大人な心はまだ持っていない。

「てめえ、俺を馬鹿にしてんのか」

大声を出したい衝動を抑えなるべく穏やかな声を出すよう無駄な努力をする・

「あら、まだいたの。早くどけてくれない？ さっさと終わらせたんだから」

しかしこんなことは日常茶飯事なサリアにとってそんなもの痛くもかゆくもない。

第一部 三章 受付嬢の仕事（後書き）

作「さて、対談コーナーがやってきました。ゲストのラウサです。どうぞ！」

ラ「どうぞ、よろしくお願いします」

作「さて、前章で二人が登場したわけですが、二人の関係とは？」

ラ「うーん、親友ってとこですかね」

作「（月並みな答え・・・）二人ともどこ出身なの？」

ラ「俺はラバス村っていう偏狭の地出身です。ディラスは違つとこらしいですけど」

作「へえ、何で？」

ラ「ディラスは俺達が10歳のときに引越してきたんですよ」

作「てことは5年の付き合いになるのか」

ラ「正確には4年3ヶ月と24日ですね」

作「細かいな、最初から仲良かったわけ？」

ラ「最初は悪かったですね。あいつ、バカだったんで話すのも嫌でしたな」

作「（バカ、ねえ）じゃあ、どうして仲良くなったの？」

ラ「まあ、あいつといるのも結構悪くなかったので・・・」

作「まあ、何があったかはいつか本章でやるでしょ」

ラ「適当ですね・・・」

作「ここで話し出されたらいくら時間があっても足りないから」

ラ「別に良いですけど」

作「あ、もうそろそろ終わりの時間だな。じゃあ、今章はここまで」

ラ「最後に次回予告ですね。『態度の悪いサリアにたいしてディラスは・・・』です。ぜひ見てください」

作「次のゲストはディラスの予定です」

第一部 第四章 受付嬢の実力

まったく謝罪などこもっていない言葉に、短気なディラスは、頭のどこかでスイッチが入ったのがわかった。

「お望みどおりさつさとこの状況を終わらせてやるよ」

威嚇のつもりで素早く拳を握り、狙いを定める。サリアはそんなディラスの様子を見てもどこ吹く風か、気にする様子は見せない。本気で殴るはずがないとでも思っているのか。

そんな様子を見て、ディラスはサリアの顔へ向かって拳を振り出した。

ディラスには、殴ってしまった後のことなどまったく頭になかった。

シャッ

風を切る音がし、サリアは後ろに殴り倒されたか、に見えた。

「な！」

ディラスは目を見開き、自分の拳の先を凝視する。

そこには無傷のサリアの姿があった。繰り出したディラスの拳はサリアの左手によって、彼女の頭の右側に流されていた。

サリアは相変わらずの面倒臭そうな顔でディラスを見ている。

「これだからお子様って嫌いなものよ。すぐに暴力にはしるんだから」

軽いため息をつき、邪魔な手を払いのける。

ディラスは自分の拳が止められた——正確にはながされた——事が信じられず、目を大きく見開いている。

「おまえ、受付のくせにどうやって……」

「あら、私、事務専門とはいえこれでも『王都使節団』の一員よ。特に、あんたみたいなのは少ないけど、どうして合格じゃないんだ

っていつて突っ込んでくる、お馬鹿な男共が時々いるのよね」

サリアはそう言い、妖しく微笑む。

「警備、1人もいなかったでしょ。黙らせるの、私達の仕事なの」
いい終わった時、もう先ほどの笑みは消え元の面倒臭そうな顔に
戻り、ディラスの方など見てはいなかった。

ディラスは啞然とするが、

「ねえ、さつさとどいてくれない？ 私、あんたみたいに暇じゃないの」

その一言で鎮火していた炎がまたくすぶり始める。

しかし、

「ディル」

という今までずっと不干渉だった親友の声にハツとして、洪々だが資料を引つ手繰り、列から離れたところへと向かう。目にはまだ怒りの光が漂っている。

サリアはそんな行動も眼中にないといった感じで、次の少年に目を向けた。

第一部 第四章 受付嬢の実力（後書き）

作「やって来ました！ 対談コーナー」

神「こんにちは。神様です」

作「久しぶりですね。どうしたんですか？」

神「いやあ、ディラスが『疲れた。かわって神さん』っていつてきたんでかわったんだよ」

作「すごいなあ、ディラス。神様に直談判しにいくなんて」

神「結構楽しかったよ！ いやあ、珍しい思考の持ち主だったね。よく誰もつつこんであげないものだよ」

作「人間って結構鈍いものだから」

神「まあ、僕は神様だからね」

作「わお、自信過剰。いいねえ、そういうの」

神「作者も十分変な性格だと思っな」

作「そりやどうも。ありがとうございます」

神「いやあ、楽しいなあ。このごろ退屈で退屈で仕方なかったから」

作「仕方ないね。今私が書いてる小説、極端に神様でてこないから」

神「もう少し出してくれても良いんじゃない？」

作「気が向いたらね」

神「ひっどい」

作「長くなったのでこの辺で終了しましょうか」

神「予告だよ。『ディラスに手ひどい対応をしたサリナ。彼女はラウサに対して・・・』見てね」

作「さよ～な～ら～」

神「バイバイ」

第一部 五章 態度豹変

ラウサが彼女の頭の中で確かな存在として、認識されたその瞬間、彼女はものすごい勢いで動いた。それこそさっきの動きの比ではない。

まず髪を綺麗に梳かし、軽くメイクを直す。そして服の乱れを直し、綺麗な姿勢に正す。仕上げに顔には魅力的な笑みを浮かべる。その間なんと0・1秒。それだけの間に魅力的な女性に早変わりしてしまった。さすがのラウサも一瞬唖然としてしまうほど。

「受験番号とお名前を教えてください」

気持ちが悪くなりそうなほどの猫なで声で話し掛ける。語尾にはハートがしっかりとついていていた。さっきの命令口調はどこにもない。加えて、さりげなく首を縮めて、顔をわずかに傾げ上目遣いをする。完璧に別人のようだ。

遠くから様子をうかがっていたディラスは唖然とする。さっきの様子を知らない男がみたら、つい目を奪われてしまうかも知れないほどに化けたのだから。

しかし、相手は人とは美的感覚が違うラウサである。

（すごいな、あれだけの動きをあんな一瞬でしてしまうとは…。さすがディラスの拳を止めただけはある）

完璧にずれたことに対し感心していた。これではせっかくの苦労も水の泡である。

ラウサは感心しつつ、相手の質問に答えるため無駄な言葉を使わずに言う。

「460番、ラウサ・ディライトです」

クールで素っ気無い言い方だ。

サリアは内心狂喜乱舞した。

（きゃあああ、超カッコイ！。本当に15歳？ もうたまんない。顔も良いしルックスも良い。しかもクール！ 絶対良い印象を残

して今のうちにお知り合いになっておかないと)

ラウサはサリナの理想どおりだ。切れ目の瞳にさらさらの絹糸のような髪、品の良い眼鏡は理知的で大人っぽい雰囲気をかもし出している。確かにこんな美形はなかなかいない。

ラウサはそんな彼女の心中などよそに、ずっと見つめられるがままにされている。しばらくしてさすがに気まずく思っただのか声をかける。

「あのー、次はなんですか？」

ラウサの声で我に返ったのか少し顔を赤らめながら、

「ごめんなさい」

と謝り、

「彼方があまりにも格好よかったので・・・、つい」

ちゃっかりアプローチも入れてくる。さっきの間は計算なのではないかと思わせるほどだ。

「いえ、別に」

やっぱりラウサは素っ気無い。しかしめげないサリア。

「血液型は？」

まったくしなくていい質問をする。受付というのかこつけていろいろ聞くつもりだった。

「言う必要はありません」

しっかり避けるラウサ。

「では生年月日は？」

諦めないサリア。

「何故ですか？」

「趣味は？」

「だから何故？」

こんな言い争いが続き、

「ありがとうございました」

サリアが御礼を言う。ちゃんとした事は聞き出せなかったが、ラウサを独り占めできただけでも満足したようだ。

長時間無駄な時間を過ごさせられたラウサは、うざがる様子も見せず涼しい顔していえ、とだけ言った。その様子に、サリアはますます目の前の美少年に心を奪われた。

第一部 五章 態度豹変（後書き）

作「こんにちは」

デ「よつす。ディラスだ」

作「前回なんで出なかったの」

デ「ちよつと考え事しようと思ってて」

作「サボってまで何考えてたの？」

デ「倉庫の有効活用について」

作「何それ」

デ「倉庫に入った時さ、もったいねえな〜って思ってた」

作「神様のところに頼みに行く時間を考える時間に充てればよかったのに」

デ「や、神さんと話してるうちに違うこと考え出して」

作「何やってんだか」

デ「はは、考え出したら止まなくなってる」

作「いつもそうだよ、ディラスは」

デ「あのさ、ディルって呼んでくんね」

作「何で？」

デ「ディラスって呼ばれると調子狂うんだよ」

作「まあ、別にいいけど」

デ「あんがと」

作「で、何話してたんだっけ？」

デ「俺に聞くなよ」

作「はあ、ディルと話していると神様のときより中身がぐだぐだに」
デ「俺を対談の相手にした時点でもう終わってるだろ」

作「仕方ないじゃん。主要キャラで出てるのがラウサとディルだけ
なんだから」

デ「あの女は？」

作「サリアのこと？ あいつはこれ以降出る予定は別に無いけど・・

・
」

デ「ふん」

作「自分からふったくせに」

デ「そろそろ終わったほうがよくね？」

作「はいはい。じゃ予告お願いね」

デ「ふああ。『特に予告することありません』ネムイ・・・」

作「何その内容」

デ「だって実際にそうじゃん。ラウとあの女が別れてさようならってなるだけだし」

作「なんか誤解を受ける言い方だなあ」

デ「でもホントじゃん」

作「そうだけど・・・」

デ「ネムイ・・・」

作「はいはい。じゃ、この辺で終わりますか」

デ「ふあい」

作「さよなら」

デ「（あの女って誰だっけ？）」
作「おい！」
デ「なあ作者、あの女って誰だ？」
作「はあ、ちよつとずれてるぞ」
デ「うゝん」
作「はあ、こりやばいな」
デ「うゝん」
作「はあ」

第一部 第六章 帰宅

サリアはラウサをまた眺め続けそうになったが、自分の執務を思い出しあわてて言うべき事を説明する。

「本日は仮登録、ということになりまして、まだ団員としては正式に認められてはいません。本登録をするため、三日後にこれからお渡します書類にサインをして、本部のほうへと持ってきてください。そこで、これからしなくてはならないことなどを説明させていただきます」

「しなくてはならないこと、とは何ですか？」

ラウサはサリアの目を見つめながら聞く。

サリアは心臓が飛び出してしまうのではないかと思うくらい鼓動が激しくなった。どきまぎしなからも答える。

「『王都使節団』では、新米の団員は何人かでパーティーを組んでもらい、一年間ほど一緒に旅をすることになっています。そのメンバーはこちらが勝手に決めさせていただくのですが、その顔合わせをしていただきます。それと、こちらから熟練の者を1人、そのメンバーに加え、旅をする上での心得や団員としての心構えなどを教えていくことになっています」

いい終えると、ラウサはありがとうと言い微笑む。

「い、いえ、そんな。仕事ですから…」

そのうぶな様子に、先ほどディラスに見せた妖しい笑みの影はどこにもない。

「私、サリアというのですけど、その、本部の方で受付をされていて結構細かいところまで知っているんです。ですから困った事がありましたら私に相談してください。個人的質問などでも良いので、
・・・」

そう言い、丁寧なしぐさで資料を1つ取り、ラウサに手渡す。ラウサは、

「ありがとうございます」

とだけ言い、ディラスの元へと向かう。

サリアはその後姿をずっと眺め続けていた。

ラウサがディラスの元へ行くとかかなり憚然としていた。どうやら、というかやつぱりさっきのサリアの態度がむかつくらしい（くっそお）。なんで女はああ良い顔してる奴にはあんな風に振る舞うんだよ）

ようは嫉妬である。

ディラスも格好良いの部類に入る。ラウサと比べてもそこまで差があるとは思っていない。むかついてしまうのは仕方がない。

八つ当たり気味にラウサに言う。

「良かったなあ。年上の——裏表があるとはいえ——お姉さんに気に入られて」

本人にとつては皮肉のつもりであつた。少しは怒るかなと思つていたのだが、返ってきたのはさすがのディラスも予想外の言葉。

「気に入られたのか？」

心底驚いた顔で逆に問われる。思わずずっとこけそうになった。

あそこまであからさかまな態度をとられ気づかないとは……。

（昔からどんな女が言い寄ってきてても軽くあしらってきたから気づいてると思つてたのに……。意外と天然なのか？ いやそれとも・

・・）

「どうした？ デイル」

ディラスの内心の葛藤など知りもせず、ラウサは真顔で聞いてくる。そんなラウサの顔を見ているうちになんだかいりい考えている自分が馬鹿らしくなってきた。

（けっ、ラウが気づいてないんだつたらあの女の努力も意味ねえな。ざまーみやがれ）

心の中でサリアを罵り、またも勝手に自己解決。

「ま、いや。帰ろうぜ、ラウ」

さっさと歩き始める。ラウサはため息をひとつつき、友の後を追

つ
た。

第一部 第六章 帰宅（後書き）

作「こんにちは。今回の対談の相手はなんと！ 今後もう出ることの無い可哀想なキャラであるサリアだ」

サ「うつさいわよ！ 作者」

作「ふつ、本当のことを言っただけさ」

サ「こんの・・・！」

作「口悪いよ、サリア」

サ「うつせえんだよ！ あたしはイイ男にしかあたしを見せてやんねえの」

作「うわっ、やだやだ。誰がこんな性悪女に騙されるんだろう」

サ「女なめんじゃねえよ。なんならあんたにも女って奴を教えてあげてもいいけど？」

作「私をなめるなよ。君みたいな奴に教えてもらわなくても平気で」

サ「つけあがんじゃないの。あたしの手にかかれば大概の男はおちるんだから」

作「ラウサには効かなかったみたいだね、君の色気」

サ「あゝラウサくんに会いたいな。チョーかっこいいもん」

作「うわ、急激に変化した」

サ「恋してる男の前では、女は皆可愛らしくありたいと願うものよ」
作「でも、今ラウサはいないけど」

サ「だって、ラウサくんがこれを見てるかもしれないし」

作「もう手遅れじゃない」

サ「違うの、ラウサくん。これは作者の陰謀よ。本当の私はこんなひどいことをしないわ！ ラウサくん、信じて」

作「女ってこわい。（ラウサがこれを見るわけないじゃん。見るのは読者だけだよ）」

サ「ラウサくん、いつでもパルス——本部——に来てね。待つて

るわ」

作「（だからラウサはこれを見ないって）頑張るね」

サ「（黙ってるや作者）ラウサくん！ いつでも私の胸に飛び込んできてね」

作「括弧の中も残るんだからね、記録に」

サ「いや〜ん。誤解しないでね？ ラウサくん」

作「（いい加減うざい）え〜結局よくわからないうちに時間ばかりが過ぎてしまいました。よってこのあたりで今章は終了したいと思います」

サ「ラウサく〜ん」

作「このバカで屑でどうしようもないアホ女。さつさと次回予告をしやがれ」

サ「あたしに命令するんじゃないやねえよ」

作「いいからさつさとしやがれ。ラウサが見てるぞ」

サ「は〜い。ラウサくん、今から次回予告するから見てね」『本部へとやって来たラウサくん』（+おまけ一匹）は控え室でどうやってサリアに告白をすべきか考えていて・・・』です。楽しみに待っています！」

作「つて、おい！ いつの間にそんな内容に変わったんだよ。勝手にお前の妄想を言うんじゃないやねえよ！」

サ「何言ってるの？ ラウサくんが私に会いたいって思うのは必然よ。だって、ラウサくんと私は・・・」

作「この辺で今章の対談コーナーは終わりたいと思います」

サ「やだ、ラウサくんったら・・・見た目よりも大胆・・・」

作「次からはまともなコーナーにしたい・・・」

第二部 一章 待合室にて

「おい、もう一度言ってみやがれ。クソババア！」

「な、誰がクソババアですよ。このクソガキ！」

「んだとー！」

アホみたいな罵りあい。人目も気にせず大声を出す2人。それを見守る5人。はたから見るとかなりおかしい光景だ。

なぜ、こんなことに・・・。

*

あれから3日後、ラウサとディラスは指示されたとおり、『王都使節団』本部——通称パルスにやってきた。そこで正式に団員であると認められた2人は、いろいろと難しい説明うけ、現在組むはずのメンバーを待つため待合室にやって来て待っている。

王都使節団では、仕事の内容や他人との連携がうまくいくように、新米は最初の一年間を仲間で組んですることになっている。基本的に6〜8人くらいで組む事になっていて、そのうちの1人は旅慣れしている団員にするらしい。

正直なところ見ず知らずの奴等と一緒に過ごすのは気が向かないラウサだが、規則だから仕方がなく、どうせ一年したら好きに行動して良いらしいので我慢する。

現在集まっているのは2人を除いて3人。

簡単に説明すると、1人目は寡黙な黒髪の少年。180cmを超える長身で業物らしき大剣を腰に下げ、来てから1言もしやべることなく目を閉じて壁に寄りかかっている。身動き1つしなく無愛想な印象。

2人目はひょうきんな少年。肩までのオレンジ色の髪を丁寧の後

るで1つにまとめている。入ってきたときから2人に始終笑顔で、少し独特な話し方で話し掛けている。時々その緑の瞳で面白そうにラウサ達を見ていて掴みどころがない。

最後は今のところ唯一の女の子。金色の髪のショートカットで可愛いらしい顔をしている。大きな紫色の瞳に、少し不恰好の黒ぶち眼鏡をかけていて、申し訳なさそうに隅のほうで座っている。どことなくオドオドしていて、おとなしい印象。

誰もが個性あふれている。8人で組む事になっているらしいので後3人。

ディラスは早くもひょうきんな少年と打ち解け、仲良さ気に話している。黒髪の少年はその会話に加わることはなく、少女もずっと隅でうつむいたまま会話に加わる気配はない。一部を除いてまったく仲良くしようとしないう少年達を見、ラウサはこれからの旅に不安を覚えるのだった。

第二部 一章 待合室にて（後書き）

作「さあ、やつとここまで来ました!」

神「何が?」

作「いや、一度これ投稿しなおしたでしょ?」

神「そうだね」

作「で、やつと第二部に突入したなと思ひまして」

神「へえ」

作「ちよつと無関心すぎじゃない? 神様」

神「だって興味ないもん」

作「なんで? やつと8人が出会うのに」

神「だから?」

作「うわゝ居るよね、クラスに一人はこんな奴が」

神「ひどくない?」

作「神様だからいいの」

神「そんなことより」

作「自分のことを『そんなこと』って」

神「何でもう第二部?」

作「なんか使つてみたかったから」

神「そんな理由で?」

作「本来なら王都をでるまでを第一部にしたかったんだけど、そうしたら後がすごいことになりそうだったんで」

神「あつそ。つまりは自分勝手な都合ね」

作「結局は自分勝手な都合になるのさ。人間だからね」

神「何カツコつけてんの」

作「うるさい。それにこんなことになったのはキャラが勝手に動くからだよ」

神「お前今すぐ世界中の作家さんに謝れ! 地面に頭をこすり付けてでも謝れ!」

作「ひどい！ 何をしたっていうの」

神「お前みたいな文才の才能も無い凡人の中の凡人が何『キャラが勝手に動く』だよ。小説家って仕事をなめんじゃねえよ」

作「うう、そこまで言わなくても」

神「それでも足りないくらいだ」

作「うわーん、ヘタレのくせに、バカのくせに」

神「神に向かって何言ってるんだよ！ バ作者」

作「うーん長くなったなあ」↑耳栓してます

神「聞け！ 作者」

作「神様何一人で叫んでんの。それより、もうそろそろ次回予告してよ」

神「てめえ、何命れ『控え室で残りのメンバーを待つラウサ達。その時、大きな音をたてて扉が開き、そこから・・・』って何で口が勝手に・・・！」

作「ふっふっふ」

神「作者！ てめえ、俺に何しやがった！」

作「お初にお目にかかる。これぞ作者一〇八の技の一つ、秘儀『らんにんぐ・まい・うえい』だ」

神「何だ？ そのへんてこな名前の技は」

作「キャラに自分の好きなようにしゃべらせる、作者にのみ使える一〇八の技の一つだ」

神「横暴だ」

作「何とでも言え。作者には敵わないのだから」

神「この・・・！」

作「ああ、読者の皆さん。大変長らくくだらないものをお見せしました。今章はこれで終わりたいと思います」

神「聞け！ 作者」

作「さようなら」

神「聞かねえか！」

作（随分と口調が変わったなあ）

第二部 二章 二人の美少女

ラウサには1つ、不思議に思う事がある。

それは年齢だ。今回の合格者のうち18歳以下は7人。これだけでも異例の人数であるにもかかわらず、現在その半分以上である5人——少なくとも見た目は——が集まっている。対外こういうのはチームごとの強さを均等にするため、多くても3人くらいが限度である。知り合いがいるなら先に申請しておけばラウサやディラスのように一緒にチームになれるが、反応から察するにどう考えても知り合いはいなく、全員初対面のようなのだ。

一応ディラスに言ってみるが、

「くじで決めたんじゃないの」

とか樂觀的なことを言っていたが、ラウサはそれで納得するわけがない。何か理由があるはずだ。

しかし、ラウサの情報だけでは答えが出るわけでもなく、相談する相手もディラスでは役に立たないし、他はまだ油断ならない。

時間だけが過ぎてゆく。その隣ではディラスが、

「つつぎは、誰っかな」

などと面白みも何もない歌を歌っている。相変わらずどこまでもマイペースで周りの目なんかまったく気にしないお子様だ。知らず、ため息が漏れる。

ラウサがこれからどうしようか考えていると、

バタンツ！

不意に大きな音を出しながら扉が開く。

扉が開いたとたん、何故か部屋の電気がいきなり消え、霧がかかってくる。部屋にいた5人は、とっさに武器を手にし、警戒。

すると光の中から人影が現れる。そこにいたのは、無防備な雰囲気

気をまとっている2人の美少女。殺気はなく、敵にしては少しおかしい、と、この部屋の前で警備——というか監視——をしていた団員が面倒くさそうに身振り手振りで「この人たちは残りのメンバーだ」と伝える。努力のかいあって伝わったのか——というか何故全員理解できた？——妙に凝った登場に全員はなんともいえない感じになる。2人はその気まずい雰囲気を感じにすることもなく、当たり前のように受け取っている。

前にいた少女が出し抜けに、

「ふっ、仕方ないですね。こんな美少女であるアタシが目の前に現れて、見とれるのも無理ないですね。ああ、美しさって、つ・み・ね」

長い赤髪のポニーテールを手でかきあげながらうつとりと酔ったように言う。何故か後ろが薔薇の花で覆われたように見えた。

(((((アホだ))))))

全員が思った。確かに本人が言うように他の女に比べたら美少女達のものに当てはまるだろう。しかし、それは黙っていたら話であり、今で確実に美少女とは認識しにくくなってしまった。

後ろにいた少女はうんざりという顔をしている。

ディラスはポツリともらす。

「なんてアホな女なんだ・・・」

言わなければいいものを。少女の肩がピクリと動く。

彼女は勤めて冷静な笑顔でディラスの方へと向き直る。

「どういう意味ですか？」

怒りを押し殺した声で言う。

「そのまんまだよ。馬鹿女」

ごまかさず素直に言う。部屋の温度が数度下がった気がした。

他は、さりげなく位置を移動し、離れる。そんな事にも気づかない2人は、

「礼儀つてものを知っていて？ 泣いて謝るのなら許してさしあげます。お姉様が優しく教えてあげましてよ。ぼ・う・や？」

言って1歩、前へと踏み出し、付け焼刃ではない威圧感をもし出す。気の弱い男どもは尻尾を出して逃げ出すだろうが、その輪には入らないディラスには通用せず、逆にぼうやという言葉に反応し、反論する。

「おい、もう一度言ってみやがれ、クソババア」

第二部 二章 二人の美少女（後書き）

作「さあ、今章のゲストはなんと・・・！」

・・・・・・

作「・・・・・・実は誰も居ないんです」

作「別にっ！ 誰もメンドくさがってきてくれなかったわけじゃないよ！？ こんなくだらないコーナーにこれ以上時間かけたくないとも言われたわけじゃないよ！？」

？（言われたのですね？）

作「別にそういうわけじゃないもん」

？（意地をはっても意味がありませんよ？）

作「だって、だって・・・・・・」

？（ほら、泣かないです）↑頭をなでてあげている

作「うえゝん・・・・・・って誰！？」

？（やつと気づいたのですか）

作「うん。で、誰？」

？（訳あつて名乗ることが出来ませんが、まあ、Nと呼んでください）

作「はあ、Nさんよろしく。それでNさんはどうしてここに？」

N（神に頼まれたのですよ。『今頃作者がかわいそうに独り対談コーナーをしているだろうから、話相手になつてきてあげて』と）

作「うんゝ 言い返せないのが悔しい・・・・・・」

N（それで作者さん。私はどうしたらよろしいのでしょうか？）

作「適当に私の質問にでも答えてて」

N（わかりました）

作「では、質問。Nさんと神様の関係は？」

N（私と神との関係ですか。まあ、一言で言うのなら主従関係ですね）

作「もちろん神様が主だよな」

N（ええ。私たちはあの方には逆らえませんか）

作「大丈夫？ 神様の奴主という立場を利用してNさんにひどいことしてない？」

N（もう慣れました）

作「してるの！？」

N（あの人にとって人生は退屈で仕方のないものですから。どうしても刺激が欲しいのです）

作「Nさん……大変だねえ。こんなに美人なのに」

N（美人？ そうかしら。私にとってはこれは当たり前なのですが）
作「Nさんは美人だよ！」

N（ありがとうございます。それよりも長くなってしまいましたので、そろそろ次回予告をしたほうが良ろしいのでは？）

作「あ、そだ。じゃあ、Nさん。よろしく」

N（はい。『いつまで経っても口げんかをやめようとしなない二人。仕方なく残りのメンバーは自己紹介をしておくことに……』だそうです）

作「それではこの辺でさようならだね」

N（ちなみに私はこの小説で出ることはありません。もしかしたら対談コーナーの相手が居ないときに出るかもしれませんが……）

作「寂しいねえ」

N（作者的には私が来ないほうがよろしいのですけれど）

作「ア、アハハ……じゃ、じゃあ、この辺で、さよなら」

N（私はいつでも皆さんの見えるところにいるのですけれど……さようなら）

作「（って言うっちゃ駄目だよ！ Nさん〜！）」

N（申し訳ありません）

作「（次からは気をつけてね？）」

N（はい）

第二部 三章 自己紹介

そして今にいたるのである。

目前ではまだ言い争いを続ける2人。数分、黙って眺めていたが、これ以上待つのは時間の無駄だと考えたラウサは他の4人を振り返り、

「皆さん。あの2人は放って置いて俺達だけでも簡単な自己紹介済ませておきませんか？ 一応、後1人来る予定ですがいつ来るかわかりませんし」

提案してみる。

「おう、やっとかやないか。あの2人の言い争いも飽きてきましたし」

ひょうきんな少年が賛同する。他も異論はないのか何も言わない。それを肯定として受け取る。

「まず名前。そして今後の参考のために年齢、得意な武器、魔法の系統をお願いします。何か言いたいことがあったら他にもどうぞ」
誰からいきます、と聞くとさつき入ってきた少女が言う。

「じゃあ、まずはディアね。本名はディリアンヌ・スペクターだけど長いし気に入ってないからディアで。今はぴっちぴちの17歳。得意なのは弓でえ、魔法は風系よ。よろしくね？」

そう言いディアは片手に腰を当て、ウイंकをひとつ。

ディアはくせのある茶色の髪をツインテールにしている、長いまつげが印象的だ。160と小柄だが、出る所はしっかり出ている。

「次はわいやな。ファンディ・マルダンセっていいですね。年は多分16ですわ。体術と炎系魔法が得意です。槍も少しは使えます。よろしく頼みますわ」

ファンディは人懐っこそうな笑みを浮かべたままニコニコしながら言った。

そして、壁にもたれかかり、ずっと何の反応も示さない無愛想な

少年を指差しながら言う。

「次はあんたやで」

そう言われた少年は面倒くさそうに目を開きこちらを向く。その瞳は髪の色にも負けない、今では珍しい黒だった。ただの黒ではなく、他のどんな色も混ざっていない、漆黒の黒。

「きれい・・・」

誰かがつぶやいた。それほどまでに宝石のように美しい眼だった。誰も他に何も言わず、静かさが――ディラス達の声を除いて――支配した。

「ハサス・ラインレスト、16。得意なのは大剣。魔法は水系」

彼の抑揚のない声に我に返る一同。ハサスはすでに元の体勢に戻り、話し掛けるなというオーラが出している。もう一度聞くのを諦めたラウサ達は、自己紹介の続きをすることにする。

「えっと、私はマリア・アフナイスといいます。15歳です。一応糸が得意です。魔法は光系です。至らない点があると思いますが、よろしく願います」

マリアはそう言い、ぺこりと礼をした。

「最後は俺ですね」

ラウサが一步前へ出て言う。

「俺はラウサ、15歳。ナイフと体術、魔法だと土と闇が得意です。これからよろしく」

一応微笑を浮かべておく。ディラスに、自分の事を紹介するときには笑顔で、と言われているためだ。ラウサほどの美少年が微笑めば対外の女性はノックアウト、いちころである。まあ、本人はそんなことひとつも理解などしておらず、ただ、
(前より、いろいろなことを話してくれ易くなったな)

位にしか思っていない。なんとも残念である。

言い終えてもまだ言い争いは続いている。いい加減やめて欲しいと思うが、そんな願いもむなしく終わる気配など微塵もない。ラウサは仕方ない、と言い勝手に紹介する。

「そうだ。向こうで言い争っている奴の事も一応言っておきますね。あいつは本名ディラス・ライシールド、通称ディル。俺と同じ15歳。剣と名のつくものなら大概どれでも得意です。魔法は全然駄目で、簡単な回復くらいなら出来ます。まあ、剣士みたいな奴ですね」
ついでに、

「あいつは見ての通り単純で、超短絡的思考、それに大馬鹿。なので覚えていて欲しいのは、時々殺意を覚えるほどむかつくときがあるんですが本人はいたって真面目だということなんです。よくこんなくだらない争いが起きるけど聞き逃してやってください」

これから一緒に行動を共にしなければならなかったらこれ位は言っておいたほうがいだろうと考え、本人が聞いたら「そんなことねえ！」といって反論するだろうことを言う。

「ディアさんはあの女性のことをご存知ですか？」

ディルといまだに言い争う美少女を指差し問う。ディアは困ったような顔をしてあちちを盗み見る。

「うーん、別に知り合いつて訳じゃないのよねえ。受付でたまたま一緒になっただけえ。あつ、でも、名前とかなら受付で書類見てたんでわかるよ」

そう言うと思いつくように頬に指をたてて首をかしげる。

「確か、シューウィアで、ディアと同じ17歳だったかな。武器は・
・レイピアで、魔法は自然系って書いてあったと思うよ」

自然系はもとの素質とかがかわってくるから習得するのが難しい、そのため今では少なくなっている。性格に難ありだが、彼女は貴重な戦力となりそうだ。

「よく覚えていましたね、ディアさん」

一瞬見た書類に内容を覚えているとは、普通、出来ない。ラウサは純粹に驚く。ディアは気をよくしたのか、小さく舌を出し、えへへと笑う。そんな仕草も似合っているから不思議だ。

しばらくすると廊下から足音が聞こえてきた。監視がそれといった反応を示さないところを見ると、どうやら残りの1人がやって来

たようだ。数人が気づいたようで扉のほうに目を向けている。

数秒して扉がキーンと普通に音を立てて開く。

時が、止まった気がした……。。

第二部 三章 自己紹介（後書き）

作「さて、やっと主要キャラたちが自己紹介してくれたので、ゲストにはこの方に来てもらいました」

デ「やつほ」。皆のアイドルディアだよん」

作「なんかいつかの神様と同じこと言ってるね・・・」

デ「神なんか知らないわよん。それより、このコーナーで誰よりも早くディアの魅力を伝えようとするなんてん・・・作者もいいことするじゃないん」

作「や、別にそんなことは考えてないけど・・・」

デ「まあ、いいわん。それで？　今回はディアのどんなことを伝えてあげればいいのん？」

作「ディアって17歳だよ。どうしてそんな子供っぽいのか？（主に仕草とか）」

デ「子供っぽくなんかないもん。ディアはこれでも十分大人なんだからん（ぶんぶん）」

作「ぶんぶんって・・・、それが子供っぽいんだよ」

デ「うるさいわよん、作者！」

作「しかも文章になってないけど歩き方とか食べ方とか随分子供っぽい・・・」

ビュンツ　トス

作「・・・」↑顔の横に矢が

デ「作者、ディアの武器は何か忘れてないん？」

作「イエ、シツカリトオボエティマス」

デ「そう、ならディアのイメージを悪くするようなことを言うのは止めてねん」

作「アイアイサー」

デ「それで？　他にはないのん？」

作「ディア様はどんな女性になりたいのですか？」

デ「まあ、ディアは見た目が可愛いからキレイ系はあきらめてるわん。だから容姿を生かして可愛い甘えんぼの妹系を目指してるのん。けっしてロリ系じゃないわん」

作「ああ、だから一生懸命ロリっぽくない性格を振舞ってるのか・・・」

デ「やめてよん！ 読者のひとたちにディアがロリみたいに伝わるじゃないん」

作「じゃあ、『生麦生米生卵』って言うてみて」

デ「ふん。それ位どおつてことないわん。えゝコホン。なまむぎなまごみえにやまてあまこ・・・ほ、ほらん。完璧に言えたわよん」
作「ぼろぼろだよ」

デ「う、うるさいんゝ！ と、とにかく今のはちよつと調子が悪かったただだもん。本当のディアはちゃんと言えるもん。ロリじゃないもん」

作「別にいえなかったからってロリってわけじゃあ」

デ「も、もう終わるわよん。えゝ次回予告ねん。『自己紹介も終わってしまいどうしようか考えている一同。そこに最後の一人が現れた・・・』だつてん。見るのよん。じゃあ、この辺でさようならゝ」
作「無理やり終わらせたな、って勝手に帰るなディア！」

デ「知らないもんゝて、うみゃ！」

作「あ、こけた」

デ「みゃゝ！」↑走って逃げていった
作「最後まで決まらなかったな・・・」

第二部 第四章 最後の一人

ディラスが超自意識過剰なアホ女と白熱した——少なくとも本人達にはそう思えた——対決をしていると、扉の開く音がした。チラッとそつちを見た——と固まる。

ディラスを見ていたシューウィアは相手が動きを止めたのを見て不思議に思ったのか、扉のほうを振り向いて、同様に固まった。そこにいたのは今まで見たことがないほどの絶世の美少女だった。腰以上ある長いさらさらの碧い髪。深い澄んだ海を思わせる碧眼の瞳。世界中の芸術家達がどれだけ心血を注いでも作ることはできないであろうほどに整った顔は、決まりきった美だけではなく独特な美をかもし出している。言葉で表してしまえばしまうほど、少女の美しさをそんなものでは表しきれないと思ってしまう。

この少女は一体？

困惑に心が支配される。

我関せずという感じでいたハサスもあの黒曜石のような目を見開き、ファンディは笑みを浮かべるのも忘れ、あのラウサでさえ今まで見たこともないような驚愕の表情を浮かべ少女を見ている。

少女はその視線をシューウィアのように当然として受け止めるわけでもなく、かといって困惑するわけでもない。例えるなら何も感じていない、そう——無感情。

少女は目線だけで集まっていた少年達を見回すとその薄桃色の唇を僅かに開く。

「皆さん、全員揃っているようですね」

綺麗な少女の声が響き渡る。彼女は一度息をつく。

「始めまして。私は、今回皆さんの研修及び準備期間中、指導をさせていただくルーネというものです」

どうぞよろしく願いします、と言い少女——ルーネは軽く綺麗にお辞儀をする。

しかし、誰もが何も言わないため、またルーネがしゃべりだす。「皆さんの名前や武器などは事前に本部より確認済みなので私にする必要はありませんが、まだしていないというのでしたらどうぞやってください」

どうですか、と問うてくるルーネにファンディがさっきのより僅かにぎこちない笑みを浮かべて言う。

「それやったらさつき簡単にしましたから大丈夫や」

えっ、いつの間に？ とディラスとシューウィアがびつくりしたような顔をし、シューウィアは一步ファンディに近づき命令する。

「ちよっと、アタシは知らなくてよ？ このアタシを差し置いて勝手にするだなんて憤慨だわ。もう一度やりなさい」

なんとも自己中心的な言葉である。

「ああ、ええっと、シューウィアさんでしたっけ？ 別にそういうつもりはなかったんですがディラスと（楽しそうに）話してしましたので邪魔するのも無粋だと思い」

余計な争いが嫌いなラウサは謝罪の言葉を向けるが、よく聞くと直接的な謝罪の言葉は一言も含まれておらず、暗にお前がくだらない事をしてたんだろといっている。

シューウィアも女である。美少年に微笑みながら言われ、悪い気はしない。うつすらと頬を赤く染めるがすぐに顔を引き締める。

「ちよっと納得いきませんが…まあ、よろしいですわ。謝ったということにしておいてあげます」

そう、上から目線で言った。

シューウィアの言葉により、もう一度全員名前だけ言ってまわり、最後に言い終えたディラスはいつもの調子を取り戻し、ずっと黙っているルーネに声をかける。

「それで今日はどうするんだ？」

普段見慣れているせいかは知らないが、あの美貌に見とれがちに

なるものの、普通に話しかける。

ルーネは少し考える素振りを見せる。

「一応、今日はこの研修の目的やこれからの進路、基本的な心得を教える予定です」

明らかに数人が顔をゆがめる。

「うげえ、面倒臭そう」

長ったらしい説明が嫌いなのか、手短かにね、と付け加える。

第二部 第四章 最後の一人（後書き）

フ「やほ〜！ ファンディやで」

作「いらつしや〜い」

フ「わいは今回何話したらええんや？」

作「そのエセ関西弁は何？」

フ「なんか個性を出したかったんと、本場の人には失礼なんやけどチャラチャラして見えるからなんやて。一応本編での理由はつくつとるらしいで」

作「関西弁がエセなのは作者が本物を再現できないからだよね・・・」

「

フ「そな当たり前やろ。他県の方言そう簡単に再現できたら誰も苦労せえへんやん」

作「てことで他のキャラの話し方についてもそんな感じだよ」

フ「にしても随分とキレイな姉ちゃんが出てきたもんやな」

作「でしょ？ そういう設定だもん。ルーネはそうじゃないと困るんだもん」

フ「にしても、美形率が大幅にたこうあらへん？」

作「だって・・・不細工よりは綺麗なほうがいいんだもん」

フ「ほぼ大多数の人がそうやないか」

作「まあまあ、いいじゃん別に。実際現代の女の子って綺麗に着飾ったら皆可愛く見えるものなんだし」

フ「ま、否定はせんけど」

作「でしょ？」

フ「個性的なメンバーがよう揃ったもんやな」

作「小説で同じような性格の人ばかり出てきたらすぐに誰が誰か分からなくなるよ」

フ「そやけどな〜まあ、作者が納得しとんなら別にええわ」

作「ファンディはメンバーの中じゃ誰が気になってんの？」

フ「いややわ〜ラブコメ展開突入なんやね」

作「きしょつ！ 紹介に使いたただけだよ」

フ「でも結局は対談に出るんやろ？ 言う意味あらへん？」

作「一応一周したら最初に戻るけど、第一部六章みたいにその場限りの出番のサリナも対談に出てもらったりするから案外次の出番は十章くらい先だったりするんだよね」

フ「ほならディラスが一番自分のこと言わへんで終わってしもうたな」

作「ラウサは結構話してくれたもんね。馴れ初め（？）とか」

フ「ディラスの第一印象は状況が状況だけに『馬鹿そう』の一言やったな」

作「あゝ変な歌とか歌ってたからね」

フ「やけどそれだけに警戒もしたわ。小説やとバカっぽい奴ほど裏があつたりするやん」

作「まあ、その後のシューウィアとの超〜〜〜〜〜低レベルの言い争いでガクツと確率は下がったけどね」

フ「ハハハ、そやな」

作「ははは」

フ「ハハハ」

作「・・・結局ファンディについて話してない」

フ「ふ、作戦通りや！」

作「くう、しかしもう時間・・・！ ふん。さっさと次回予告でもしておけ」

フ「ほな『なんだか楽しく始まりそうな旅に！・・・なるわけがなく、不穏な空気が流れる・・・』やって。まあ、楽しみにしといてな」

作「んじゃ次は・・・マリアね、バイバイ」

第二部 五章 不満

「おい。」

と、ここで沈黙を通していたハサスが始めて口を挟む。その黒眼を開きまっすぐにルーネを見据える。

「規則として1人、旅慣れしているやつが入るのは知っているし了承しているが、俺よりも弱そうに見える、しかも女にそうえらそんなことやってほしくねえな。」

まだなめられがちな年頃とはいえ、ここまで自分の力だけでやってきたのである。初対面の女に指導されることは、そう簡単に受け入れられないのであろう。彼にもプライドがあるのだ。

当人は相変わらざる無表情で、今の言葉に何の思いも抱かなかったようだ。

「そうねん。自分より弱い奴に指導なんてしてほしくないわん」

ハサスの言葉にディアが賛同するように言う。

「そうですね。アタシよりちょっと、そう、ほんのちょっとだけ美しいからってつけあがるんじゃないやありませんことよ」

自分より美しいと認めてしまうことは不本意なのであろう。顔を歪ませながら言う。

「そうか？ こないなキレイな姉ちゃんに手取り足取り教えてもらえるんやったら、わいは大歓迎やで？」

頬を緩めながらルーネのほうを見る。まあ、彼とて健全な男子である。美人と旅ができることはやはりうれしいのであろう。

だが、そんなことでハサスが納得するわけがない。

「お前みたいな能天気野郎の価値観を俺に押しつけんじゃねえ」
現状はさらに悪化。他の人々はこのことには対して拘りを持っていないのか、黙って見ていて、特にディラスは傍目から見てもわかるくらいどうでもよさそうな顔をして傍観する。

問題の当人であるルーネは、相変わらざる無表情で我関せずとい

う感じで眺めている。

（いやあ、当人がそれって駄目だろう？）

ディラスがのん気にそんなことを考えていると、無視されていることに気づいたのかハサスがルーネに突っかかる。

「おい、お前無視してんじゃねえよ」

ルーネは気だるげな動作でハサスのほうを見る。

「どうすれば、あなたは認めてくれるのでしょうか？」

あざけりも、皮肉もどこにも感じさせず、ただ純粹に疑問をぶつけてくる。ハサス是不敵な笑みを浮かべ言い放つ。

「もちろん、俺より強いってことを示して見せればいいんだ」

それにはどこか、輕蔑の意思がこめられていた。ルーネは一瞬だけ同じような色を目にうかべたが、すぐに何の色も読み取れなくなる。彼女の返答は、まるでそう言われる事を知っていたかのようによどみなかった。

——いいわ——

第二部 五章 不満（後書き）

作「はい。今回はマリアです」

マ「こ、こんにちは」

作「なんだか大変な空気になっちゃったね」

マ「はい」

作「マリアはルーネのことをどう思う？」

マ「き、きれいな人だと思います」

作「うん。そりやそうだろうね。そういう設定だから」

マ「え、あ、はい」

作「えっと、どんな人だと思った？」

マ「クールな人、ですかね」

作「ハサスみたいに反感は覚えないの？」

マ「わ、私なんかがそんな、反感なんて・・・」

作「いや、別にいいけど」

マ「いえいえ、ルーネ様にそんな」

作「様？」

マ「はい？」

作「・・・様をつけるの？」

マ「はい」

作「え、何で？」

マ「い、いえ、人様を呼び捨てになんてできません」

作「ラウサとかハサスとかも？」

マ「はい。ラウサ様、ハサス様とお呼びします」

作「そんなへりくだらなくても」

マ「そんな・・・わ、私なんかが」

作「いや、だからね？」

マ「ごめんなさい・・・」

作「うん。もういいよ」

マ「は、はい・・・」

作「・・・そろそろ終わろうか」

マ「あ、はい」

作「・・・」

マ「・・・」

作「・・・次回予告を」

マ「すみません！ えと『ただただ黒い空間で、ひとりの男が呟く。

彼は思う。変わらないことを・・・』」

作「じゃ、この辺で。さようなら」

マ「はい。さようなら」

第二部 第六章 黒い男

全てが真っ黒な空間。そこにあるはずの感情も、ものも、空気も、生物も全てが黒く染まっている。

しかし、一瞬後には全てが真っ白に染まった。いや、もともと白に染まった空間だったのだ。それが、男のせいで真っ黒に染まったかのように見えたのだ。実際、今もまるで漆黒な闇のイメージばかりを感じる。

「やはり、出会ったか…」

空間の中心で男が1人呟いた。

彼は、白いけど黒い、椅子をかたどったものに深く腰掛けた。それは嫌な音を立ててきしみ、苦しむ。男はそれを気にも留めず深い思考の闇へと落ちていく。

彼は思う。

——どうしても、この道を選ぶのだな…。ひとつの細い細い希望への綱渡り。

彼は願っていた。

——彼女が変えようとしていた運命が、今回こそ変われ…。

彼はあきらめていた。

——どうせ、今回も同じ道を歩むのだ。この世界でも君は…。

彼は悲しんだ。

——どうして、俺の世界なのに君はいつもその道を歩んでいくんだ。

彼は理解できなかった。

——どうして俺の手を握ってくれないんだ。

彼はその度絶望していた。どんなに手を尽くしても、手を離すのだ。必ず一歩引いたところで彼を見つめるだけだった。

最初から、離してくれていたらいいのだ。期待を持たせるような距離を持つからこちらが困るのだ。

「は、はは」

彼はいきなり笑い出した。どこか狂った笑い方だったが、その人外の美貌にはありえないくらい似合っていた。

彼はどこからかナイフのような刃を持ったものを取り出した。それは神聖な空気をまとっており、彼の美貌と絵的にはひどく似合っていたが、その空間には場違いだった。彼が持つにはふさわしいはずなのに、彼の存在はそれを拒否していた。

それを高く振り上げ、座っていた椅子に刺した。

椅子はひどく不気味な悲鳴を上げ震える。

彼はそれがお気に召さなかったようだ。うるさいとでも言うように引き抜いた後、もう一度さつきよりも強く刺し込んだ。椅子はより一層高く大きく悲鳴を上げる。

しばらくすると音は噎れつくし、少しずつ小さくなり聞こえなくなった。

彼はそれに満足したのか小さく笑みをたたえ、手を一振りする。すると、椅子がいきなり消える。彼は重力に従い下へ落ちていく…と思われたが、まるでまだ椅子があるかのようにそこに先ほどと同じ姿勢でいた。

彼は呟く。

「どうせ、また繰り返す。同じ考えを行動を…思いを…」

自嘲気味に言つと、再び笑い出した。
その声は、彼がやめた後も流れ続けていた。

第二部 第六章 黒い男（後書き）

作「こんにちは！ 前回誰が出るのか予告してなかったんで困ったと思うんですね。今回はシューウィアだよ！」

シ「ごきげんよう。皆さん」

作「さて、シューウィアは口調はお嬢様キャラだけど実際どうなの？」

シ「さあ？ 普通、というのがよく分かりませんので。周りの家は同じような大きさのものばかりでしたけど」

作「シューウィアってナルシスト？」

シ「そうですね。どこぞの愚民どものように自らを貶めるような輩と一緒にされるくらいならナルシストで結構ですわ。まあ、アタシにはそれに見合うだけの能力もしっかり持っていますし」

作「ひゃゝかつこいいね。いいね。ただのナルシストってうざいだけだからなあ」

シ「それに、本当の意味でアタシはまだナルシストとは言えないかもしれないませんわね」

作「何で？」

シ「目標、というべきなのかしら。アタシにはまだまだ遠く及ばない方々がたくさんいらっしやいますから」

作「誰々？」

シ「お婆様とかですわ」

作「そんなに？」

シ「ええ。アタシはいまだかつてあの方以上に素晴らしい方とであつたことはありませんわ」

作「ふゝん。一度お会いしたいものだね」

シ「それよりそろそろ終わつたほうが良いのでは？」

作「そだね。じゃ、予告よろしく」

シ「ええ。『森の中、ハサスは走る。初めて味わう恐怖に、彼は・

・『ですわ』

作「じゃ、ばいばい」

シ「次の対談相手はルーネさんですわ。では皆さん、ごきげんよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309g/>

人形姫の終わりなき歯車

2010年10月10日05時21分発行